
ミレニアムなアイツと侵略計画

BJHS文芸部・東沢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「レニアムなアイツと侵略計画

【著者名】

Z65390

【作者名】

BJH文芸部・東沢

【あらすじ】

「「レニアム」といえば一〇〇〇年一〇〇〇年ぐらいたいえば恐怖の大王！？」

そんな雑な発想から生まれた掌編です。

西暦一〇〇〇年。今年はキリスト教的にはなんだか意味のある年らしいが、年末にはクリスマスを祝い、正月には神社に行くような一般的な高校生である俺には全く関係ない話だ。

そんなことを考えながら居間でぼーっとテレビを見ていると、二階から大きな物音が聞こえてきた。

まずい、積んでたゲームがついに崩れたか！？

俺はそう思つて大急ぎで部屋へと駆け上がつた。ドアを開けると

「うおっ！」

そこにあつたのは、無残に崩れ去つたゲームソフト達の山……ではなく、「DIEO」とプリントが入つたTシャツを着てい、腰まで届くボニー・テールの可愛らしい中学生くらいの少女だった。

「ディーオ……？」

俺は状況が全く把握できず、少女のTシャツの文字をバカっぽく読んでしまつた。

「違う！ 大王！ Die O！」

しかもなんか反論された。

というよりなんでこんな奴が俺の部屋にいるんだ？

俺は驚きを通り越して呆れていた。

「私の名前は恐怖の大王。アンゴルモアを復活させて地球を侵略するためになりました」

少女はニヤリと笑つた。

場が凍つた。というより俺が凍つた。恐怖の大王だと？

「なあ……恐怖の大王が来るのって、去年じゃなかつたか？」

今度は”自称”恐怖の大王が凍りついた。

……わかった。こいつはバカだ。

「ななな何を言つてるのかわかりません！ 今は一九九九年ですも

んね？」

「今は一〇〇〇年の一月三日だ。つまり君の来るべき年はつい三日前に終了してしまったのだよ」

そこまでいつて大王の方を見ると、怒りからか恥ずかしさからか顔を真っ赤にして震えていた。良い気味だ。

「大体勝手に人の部屋に上がりこんでこんな一年遅れのギャグをやるなんてどういうつもりなんだ？」

「ふふふ、それにはちゃんと理由があるのです。というかギャグじやありません」

そう言つて大王はさつきの様子はどこへやら、にこやかに俺の部屋の床から一冊の本を拾い上げた。俺の本じゃないから、自分でわざわざ持ち込んだらう。「苦労なこつた。

「それを見てください」

俺は大王の差し出した本を受け取つて、「トスノダラムスの大予言」と書かれた表紙を見た。

「……パクリじゃん。これ。というか名前どうなつてるんだ。

「ノストラダムス」と内容も全く一緒。

「その本は私の存在が記された門外不出の本なのです！」

案の定、背表紙には「禁貸出」と書いてあつた。図書館から持つてきたのかよ。マナー違反だろ。

そのくせ本人は勝ち誇つた顔でニヤニヤしてやがる。驚いたか、とでもいいたいんだろう。

……俺はこの不法侵入大王を警察に突き出すことにした。

携帯を取り出し、「一」「一」「〇」をダイヤルする。

「こらーつ！ 人の話を聞けー！」

大王が叫んでるが、無視。話なら警察のおっちゃんに聞いてもらえ。

「ううう……無視とは酷いですね……ま、丁度いいですね。私の力をみせてあげます！」

発信音が止まつた。

「もしもし警察ですか？ アホな不法侵入者が……」
無言。

耳から外して画面を見てみる。

通話は切れていて、待受画面に表示が戻っていた。……そして、画面には「エラーが発生しました」の文字。

大王の方を見ると、また不敵にニヤニヤしていた。

「ミレニアム・バグ」として知られる、一〇〇〇年一月一日になつたときにコンピュータが日付を処理できなくなるバグ。俺はそれを思い浮かべた。

……でも今は三日だ。なぜ一月一日でなく今更なのかは知らない。もしかすると本当にこいつが恐怖の大王なのか？俺は部屋に入る前のことを考える。テレビを見る時に聞いた物音。今考えるとあれは物が落ちた「ドシン」という音ではなくどちらかといつと「ドーン」という爆発音に似ていたような

「どうですか？」

「うちの逡巡など全く意に介さず本当にうれしそうな顔をして聞いてやがる。

「どうって……とこりでキミはこれの他に何かできるの？」

大王はおもいっきりコケた。ひとりでバックドロップが出来るなんてずいぶん器用だな。図星か。

「キミは確かに恐怖の大王だ。それは認めよう」

俺がそう言うのを聞いた大王は、とたんにぱあっと明るい顔になる。違う意味でも十分恐怖だがな。特にバカ加減。

「でも、これからどうするの？ ワンピューターをフリーズせられるだけじゃ地球侵略なんて無理だろ？」

「そ、それは……」

今度はシクンとなる。表情を口々口々変わつて忙しい奴だ。

「そこは私の惱殺セクシーアタックで」

「出来るかつて」

誰がそんな幼児体型で惱殺されるんだよ。可愛いけど。……なん

かバカすぎて不憫になってしまった。

「……」

また黙りこんでしまった。

「じゃあ、とりえず今日はどいつももなんだよ？ 恐怖の大王なら、『空』から落ちてきたんだろ？ 帰る所無いんじゃないのか？」

「……」

「キミが嫌じやなかつたらいいにしてもいいよ。どうかこんな広い家に一人暮らしだし」

「……あなたが変態口づけんじゃなければぜひお願ひします」

「誰が変態か！」

「Jで泊めなかつたら変態の上にへタレつてことになるんだろうな……」

俺はそんなことをぼやきつつ、一人分の用意を始めるのだった。

Jの後、Jのせいでの学校生活にも大波乱が起きたのだが

それはまた別の話。

(後書き)

実は初めて書き上げた小説だつたりします。
タイトルから分かるようにもとは電撃レシジョウに書いたものです。
恐怖の大王は結構可愛くかけたのではないでしょか（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6539o/>

ミレニアムなアイツと侵略計画

2010年11月1日22時55分発行